優秀賞

一碗の茶に込められた想い

都城市立祝吉中学校三年（宮崎県）
岩廣　奈海

三年前のある日、一碗の茶を飲み、私の目から涙が溢れ、声を上げて泣いた。

私を大切に育ててくれた最愛の祖父を突然亡くし、抜け殻状態だった私を茶道の先生が茶室に招き、茶を点ててくださった。先生が作り上げた茶室の静けさに癒やされ、茶道の「客人を想い、全力を尽くすおもてなしの心」を実感し、私の暗く沈んだ心が解放された。

私は小学校のクラブ活動で茶道の楽しさを知り、更に深く学びたいと思い、クラブ活動でお世話になった先生に相談し、正式に入門した。

今年、日向市で開催された裏千家の鵬雲斎大宗匠の講演会を聞く貴重な機会を得た。大宗匠は「一盌からピースフルネスを」の理念で活動されており、特に太平洋戦争の時、ご自身が特攻隊員として戦地に赴く際に茶道具を持参され、出撃前の戦友のために茶を点てたエピソードに心を打たれた。

「生きて帰ったら、お前の茶室で茶を飲ませてくれや」

戦友は言い、飛び立った。大宗匠はどのような思いで見送ったのだろう。特攻隊員として、国に死を強制された彼らにとって、この一碗の茶は、人として生きていることを実感した最後の一刻だったのではないだろうか。ご自身の経験から、平和や安心できる心を持つピースフルネスという考えが生まれ、茶道を通じ、多くの方に寄り添ってこられた事に共感し、感銘を受けた。

私の祖父は生前、戦死した曾祖父の、遺品や家族にまつわる話をよく聞かせてくれた。写真でしか見たことのない曾祖父だが、遺品や手紙が大切に残されている。遺書の最後には「誠にすまなかった。心配ばかりかけただけでなく、その方の一生も犠牲にしてなんとも詫びようがない。呉々も体を大事に。遥かにその方の幸せを祈る」と曾祖母に向け、書かれている。曾祖母はこれを読み、泣き崩れたそうだ。十年近くも海を隔て数百里、想い合いながら西と東に別々に暮らし、遂には逢う事も叶わなかった。そこには時代に翻弄された家族の姿があり、胸が引き裂かれる思いがした。

戦争により、大切な家族を失った人々や犠牲にあったあまりにも多くの尊い命。生き延びた人々も心に深い傷を負い、日本は多くのものを失い、悲しみが生まれた。それは

日本だけでなく、対戦国もまた同じだ。一人一人が心を持った人間である。争いからは何も得られない。お互いがお互いを理解し合い、認め、相手を思いやることで大宗匠のおっしゃるピースフルネスな心になるのではないだろうか。

私はこうして鉛筆を持ち勉学に励み、茶道を学ぶことができている。なんともありがたいことだ。だが、本当にそれで良いのだろうか。自分だけ、自分の国だけ良ければ良いのだろうか。先人達が命を賭け、守りたかった未来とはどのようなものなのだろうか。

慢心や自分に執着する心があると茶の心の世界を捉えることはできない。進んで教えを乞い、よく育つように心がける。そうすることによって初めて、慢心と執着を越え、「冷え枯るる心」に到達することができると村田珠光は言う。

私は曾祖父の犠牲の上に今を生きている。だからこそ、私は「自分には何ができるだろう」と常に考えながら、茶道を通じ、相手を思いやることの大切さを学んでいきたい。

そして、感謝の心を持ち、いつか私も相手を想い、温かい気持ちに包まれるような茶を点てることができる人になりたい。

三年前のあの日、一碗の茶を点ててくれた先生のように…。